

“科学技術” に国境はない

日中大学生がロボット作りで交流、相互理解深める

協会受け入れの北京理工大生
東京電機大でモノづくり体験

「日本の科学技術を学びたい」。北京理工大学の学生 26 人（男 22 人、女 4 人）が 1 月 29 日から 2 月 5 日まで来日し、30・31 の両日には東京電機大学（足立区・千住）で、モーターで動く「ライトレースロボット」（四輪車のロボット）を日本の大学生と共同製作するなどして交流した。一行は「さくらサイエンスプラン」の一環で来日。中日友好協会が派遣し、（公社）日中友好協会が受け入れた。

同プランは、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が進める「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」の別称で、アジアと日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指している。

協会は今回、ロボット開発を中心とした日本の科学技術の現状を理解してもらうことを目的に北京理工大学から学生を招へい。一般家庭でのホームステイなども手配し、日本の文化・習慣への理解を促した。

東京電機大学との交流では、まずは日中混成のグループに分かれ秋葉原の電気街で部品を購入。その後、同大学のワークショップルームへ移動し、ロボットの共同製作に取りかかった。作業に先立ち、同大学未来科学部ロボット・メカトロニクス学科長の汐月哲夫教授（工学博士）が「交流を通じて、メカトロニクスと“モノづくり”を体感し、



設計図を見ながら話し合う日中の大学生。1 月 30 日、東京電機大学で

楽しんでほしい」と促すと、中国側学生の代表としてあいさつした陳孫傑さんは「科学技術に国境はない。友好的で、協力的な交流にしたい」と答えた。

日中の学生は英語や筆談でコミュニケーションを取って役割分担を決め、その後は慣れた手つきでハンダごてやニッパーを使いながらロボット作りを楽しんだ。日本の学生からは「速度は英語で何て言うんだっけ」「漢字で書いた方が早いよ」などの声が聞かれ、会話に困難さを感じながらも、笑顔がこぼれ、楽しそうな様子うかがえた。また、作業の間には、互いの連絡先アドレスを交換する姿も見られた。

ライントレースロボットは部品の組み合わせによって、走る速度やパワーなどの性能が変わる。翌日は完成したロボットをコースで走らせタイムを計り、グループごとに課題発表も行った。東京電機大学の学生・宮川北斗さんは「導線の切り方など、日中の学生間で作業方法に違いが見られたりして面白かった」と振り返った。

一行は滞在中、茨城県つくば市や山梨県のリニア見学センター、福岡県のロボットメーカーなども訪れた。

仲良くなって、問題もすぐ解決

北京理工大学機械工学科 謝軍さん

まず、最初に交流を通じて仲良くなってから、ライントレースロボットの製作を一緒に行ったので、(作業の過程で)何か問題が起こってもすぐに解決することができた。英語を使って何とか会話もでき、とても楽しい時間を過ごすことができた。



主な日程

〈1月〉	
29日	来日 日本科学未来館訪問
30日	千葉工業大学スカイツリーキャンパス訪問 東京電機大学で交流
31日	“ ホームステイ
〈2月〉	
1日	山梨県立リニア
2日	高エネルギー加速器研究機構訪問
3日	柏の葉キャンパスタウン見学(千葉県)
4日	株テムザック訪問
5日	帰国

ホストファミリーからの声

交流時間が足りない！

千葉県日中常任理事 若林慶三（67）

1月31日から1泊2日で北京理工大学の男子2人、劉果さんと徐傑さんをホームステイさせました。協会本部からの協力依頼で初めての受け入れでした。

協会本部から協力依頼があった際、大学名を聞き驚きました。松戸市日中が過去7回実施した（短期留学）先である北京中央民族大学の隣で、散歩したこともあり、受け入れに親近感が湧き不安はあまりありませんでした。不安があったのは本人を見るまでどんな学生かな？ということ。一方、受け入れに当たり、交流時間を無駄にしないために分単位の日程表（JR、地下鉄の時刻を調べる）とお風呂とトイレの使い方の説明を中国語で作りました。

初日は、浅草を観光しお参りの仕方を彼らに教えました。その後は途中で合流した孫3人と、カラオケとすき焼き食べ放題に行きました。すき焼きでは、生卵に挑戦しましたが慣れないのでギブアップ!帰宅後は、孫娘が作ったデコレーションケーキで“吃饱了!”（イチゴは上海で1月27日に購入）。翌日の朝食では納豆に苦戦しましたが、たくあんは喜んで食べていました。

我が家は、1階に私だけ（妻は入院中）ですが、2階には娘夫婦と孫6人がいます。記念写真は“吃饱了”のあと撮りました。孫たちは言葉が通じなくても、お兄ちゃんとゲームをして、喜びを越して興奮状態でした。翌日の別れでは、2番目の孫が涙を流しているのので聞くと、「せっかく仲良くなったのに帰るのは寂しい」とのこと。例え言葉が通じなくても、心が通じれば「国境はない」と感じました。



わが家の居間で。最左が徐さん、その右が劉さん。最右が私

“友好の輪、拡大のホームステイ

東京都日中会員 伊藤洋平（32）

私は実家に両親2人とともに北京理工大学の学生・趙越さんを1泊2日で招きました。私は中国に関心があるものの、両親は私が北京留学中に北京を一度訪れたぐらいで、特に思い入れがあるわけではないという状態でした。中国語はもちろん話せず、私が通訳をし

て会話をしました。

夕食を一緒にしながら話はずむわけですが、時間が経つと、きわどい質問も出てきます。趙越さんは大陸出身ですが、両親からは「台湾の方が大陸よりも親日的だよね」「どちらかといえば台湾の方が好きだな」などの発言も出てきます。もし自分が中国で同じような質問をされたら困るなと思いましたが、日本の年配の人の考えを学ぶ良い機会かと思って、そのまま伝えました。「その部分は歴史的な問題があるから理解できる」と言ってはくれたものの、答えるのはかなりつらかったのではないのでしょうか。

日本の一般家庭の雰囲気を感じてもらおうということで、卵かけごはんを食べてもらうなど、中国人からしたら少し貴重な経験もしてもらいました。生の卵を食べる習慣がない中国ではありますが、「おいしかったので帰国したら家族とみんなで食べてみたい」と言ってくれました。一方、両親にも刺激になったようで、「優秀そうな人ね」「思った以上にいろいろ話せてよかった」



趙越さん（後方左）と一緒に4人で

と言っていました。ホームステイというのは、ある程度家族の理解が必要にはなりませんが、実際の中国の人に接したことがない人も接することができる、“日中友好の輪”を広げるための良い機会になるかな、と思いました。